

古代服装研究(第6報)

— かぶりものの変遷 (2) —

岡 綾子・野津哲子
(被服構成学研究室)

A Study of Ancient Costume (Part 6) The Historical Changes of Headgears (2)

Ayako Oka・Tetsuko Notsu

I 緒言

かぶりものは英語で Headgear, Head-dress, Head-Piece など表現されている。かぶりものは体の最上部に位置を占めることもあって上下、左右、斜めなどいずれの広範にも空間的な発展の可能性が考えられる。中世期以来西洋婦人のかぶりものが造形的な変化をしてきた一つの素因も、このあたりにあると思われる。特にかぶりものは私どもの顔と深い関係があることから相手に意義深い印象を与えることも日常生活で経験していることである。前述のようなことからかぶりものは私どもの意思および行為と結びついて、特殊の内容を表現したり習慣を設定したりしたと思われる。例えば「冠^{かんむり}弾き」がかぶりものの埃を払うことから仕官の用意をすること、またかぶりものを柱などに掛けることから離れて、官を辞するという意味になったりした。また武弁の弁はかぶりものであることから武人のかぶりものという言葉が武人を意味することになったりした。

習慣の例としては(1)近代まで行われた元服である。字義から解すると元服とは頭(元)にかぶりもの(服)をかぶることにすぎない。しかしこれが人生における一つの有意義な行事として長く行われたのである。(2)わが国では項(うなじ)を露わして貴人の前に出ることはできなかった。必ずかぶりものを必要としたのである。中国では士分以上の者は冠をつけるのを忘れたり怠ったりするのを大なる恥辱とした時代があった。齊の桓公は徳高く「高冠博帯を以って国を治めた」といわれているが、あるとき冠を忘れたのを恥じて三日間朝に出なかったということである。かぶりものは原始形体の時代にも単なる装飾にとどまらず多少実用性を考えていたとすればわが祖先にも草昧の時代すでにかぶりものをもってたと想像できる。以上のようなことからかぶりものは私どもの身近な日常生活の中から追求されるのではないかと思ひ考察をすすめた。

かぶりものの概要については第5報で述べた通りである。

かぶりものにはたくさん種類があるが本研究では特に冠について調査した資料および形式図を重点にして文献と照合しながら検討したので報告する。

II かぶりもの

I 冠

A 古墳時代

太古は形のいかんを問わず「かかぶり」といっていた。すなわち絹をもって袋の如く縫い縁をとったもののかぶるという意である。延喜の頃より冠と帽は別になり冠は正服以上に用い帽は平服に用いる習慣となり位官のあるものは家内において略服の時のみ帽をかぶり参朝の時は冠を戴くのであった。

¹⁾古事記に「伏して惟(おもひみ)るに、皇帝階下、一を得て光宅(いま)い、三に通じて亭(そだ)て育ひたまふ。紫宸に御して徳は馬蹄の極まる所に被(およ)び、玄扈(げんご)に坐して化は船頭の速(およ)ぶ所を照したまふ。日浮びて暉(ひかり)を重ね、雲散りて烟に非ず。柯を連ね穂をあはす瑞、史書(しる)すこと絶えず、烽(とぶひ)を列(つら)ね譯(をさ)を重ねる貢、府月として空しきこと無し。名は文命より高く、徳は天乙にも冠たりと謂(まを)すべし」。

²⁾風土記に「田俣山(たまた)郡家(こほりのみや)の正南(まみなみ)一十九里(さと)なり。柁(ひのき)、粉(すぎ)あり」。「長柄山(ながら)郡家の東南(たつみ)のかた一十九里なり。柁・粉あり」。「吉栗山(きくり)郡家の西南(ひつじさる)のかた十八里なり。柁・梅あり。謂(い)はゆる天(あめ)の下造らし大神の官の材(くれき)を造る山なり」。「宇比多伎山(うひたき)郡家の東南(たつみ)のかた五里五十六歩(あし)なり。大神の御屋(みや)なり」。「稻積山(いなづみ)郡家の東南のかた五里七十六歩なり。大神の稻積なり」。「陰山(かげ)郡家の東南のかた五里一百一十六歩なり。東(ひむがし)に樹材(はやし)あ

り。三つの方は並びに磯（いしはら）なり。大神の御稻種（みいなだね）なり」。「梓山（ほこ）郡家の東南のかた五里二百五十六歩なり。

南と西とは竝（なら）びに樹林あり。東と北とは竝びに磯なり。大神の御梓なり」。「冠山（かがふり）郡家の東南のかた五里二百五十六歩なり。大神の御冠（みかがふり）なり」。凡（すべ）て、諸（もろもろ）の山野（やまの）に在るところの草木は、白蕨（やまかがみ）・桔梗（ありのひふき）・藍漆（やまあさ）・龍膽（えやみぐさ）。商陸（いをすぎ）・統断（やまあぎみ）・独活（つちたら）・白芷（よろひぐさ）・秦椒（かははじかみ）・百部根（ほとづら）・百合（ゆり）・卷柏（いはくみ）・石斛（いはぐすり）・升麻（とりのあしぐさ）・當歸（やまぜり）・石葦（いはかしは）・麦門冬（やますげ）・杜仲（はひまゆみ）・細辛（みらのねぐさ）・茯苓（まつほど）・葛根（くずのね）・薇蕨（わらび）・藤（ふじ）・李（すもも）・蜀椒（なるはじかみ）・檜（ひのき）・杉（すぎ）・榧（かへ）・赤桐（あかぎり）・白桐（あをぎり）・椿（つばき）・槻（つき）・柘（つみ）・榆（にれ）・藁（きはだ）・楮（かぢ）なり」。

神皇正統記に「昔仲哀（ちゆうあい）天皇熊襲（くまそ）ヲセメサセ給シ行宮（かりみや）ニテ神サリマシマシキ。サレド神功皇后程（じんぐうこうごうほど）ク三韓ヲタイラゲ、諸皇子ノ亂ヲシツメラレテ、胎中天ナ皇（たいちゅうてんわう）ノ御代ニサダマリキ。コノ君聖運（きみせいうん）マシマシシカバ、百七十餘年中タエニ一統（いちとう）ノ天下ヲシラセ給テ、御目ノ前ニテ日嗣ヲサダメサセ給又。功（こう）モナク徳モナキヌス人世ニオゴリテ、四トセ餘ガホド宸襟（しんきん）ヲナヤマシ、御世ヲスグサセ給ヌレバ、御怨念（ごをんねん）ノ末ムナシク侍リナンヤ。今の御門（みかど）マタ天照太神ヨリコノカタノ正統ヲウケマシマシヌレバ、コノ御光ニアラソヒタテマツル者ヤハアルベキ。中々カクテシヅマルベキ時ノ運トゾオボエ侍ル。第九十六代、第五十世ノ天皇。諱人義良（のりよし）、後醍醐ノ天皇第七御子（だいしちのみこ）。御母准三宮、藤原ノ廉子（れんし）。コノ君ハラマレサセ給ハントテ、日ヲイダクトナン夢ニ見申サセ給ケルトゾ。サレバアマタノ御子ノ中ニタダナルマジキ御コトトゾカネテヨリキコエサセ給シ。元弘癸酉1年（げんこうみづのととり）、アヅマノ陸奥、出羽ノカタメニテオモムカセ給。甲戌（きのえいぬ）ノ夏、立親王、丙子（ひのえね）ノ春、都ニノボラセマシマシテ、内裏ニテ御元服。加冠（かくわん）左ノオトナリ。スナハチ三品ニ敍シ、陸奥ノ太守ニ任ゼサセ給」。とあるなどはその初めであると思われる。

埴輪などにも相当進んだ形体のかぶりものを頭に戴いてあるのが見られたことは第5報で述べた通りである。したがって太古の時代かぶりものの存在したことは立証できたと思う。一方ギリシャのペタサスが日光や雨をさけるための使命をもっていたこと。エジプトの富裕者がカズラを用いたことにも一面強烈な光線を避けるための帽子であったことなどに考えあわせると、わが太古のかぶりものにも多かれ少なかれ実用性がともなっていたこ

とは想像できるのではなかろうか。また日常生活の中にかぶりものがあつたことはより一層明らかになったと思う。

この時代の原始的な衣服については第1報で報告した通りであるが、大和地方に固定した文化がめばえて、大和朝廷が大陸との交通を行なうようになると、その衣服もだんだん整えられてきた。ここに古墳などからの出土品・埴輪・記紀などの記述によって次第に服飾文化が明らかになって行くのである。したがってこれらの人々の服装が衣襖（きぬはかま）・衣裳（きぬも）形式のもので、男子は身に筒袖（つつそで）の短衣・下に太いスラックス（パンツ）形式の褌をつけ、女子は同じような上衣と下にスカート形式の裳をつけていた。この形式は大陸の北方民族が用いていたもので、はやくからわが国に伝えられ一部の部族や貴族に着用されていた。

魏志（ぎし）によると首長および何か行事のある時にかぶりものを用いていたとある。埴輪にも袋状のもの（帽）をかぶつたもの・環状の冠をかぶつたものなどがあり、この形式は後世まで冠と烏帽子（えぼし）として引きつがれている。

以上古墳時代の冠についていえることは(1)上の方が息抜けになっていること。(2)頭の周囲を飾るけれども頭頂をおおわぬものが多いこと。これには2種ある。㊶……る角形の半頭式……る角形のようなものを前額部にあて後頭部で結びとめた冠。武蔵国比企郡大谷村字花ノ木発掘の男子埴輪人物像の頭部および越前国吉田郡吉野村大字吉野境発掘の銀製または金銅製の冠がそれである。㊶……西洋の王冠のような形をしたもので同じ高さで頭部を廻っている。常陸国東茨城郡川根村大字駒渡発掘の埴輪人物像（東京国立博物館蔵）の頭部がそれである。この系統のものは銅板を切り抜いて多くの同質の円形歩揺を垂下した金銅の立飾りの冠が上野国佐波郡上陽村大字山王から発掘されている。（東京国立博物館蔵）

日飛鳥・奈良時代

7世紀ごろになると朝鮮を通じて大陸の文化との交流によって、国内の文化も次第に高まり国家意識も強くなってきた。聖徳太子が推古天皇の摂政となり仏教のみならず、すべて範を大陸にもとめ文運は急速に進んだ。この時服飾方面でも画期的な冠位12階の制定があつた。これは冠の種類によって位階を明示し、朝廷での席次を示した最初の制度。古代の中国の礼制によつたもので、わが国では推古11年（603）の末に制定され、翌年の元日に実施された。12階は徳・仁・礼・信・義・智の6種をさらに大小に分けて12階とし、これに陰陽5行説によって

当色（官位相当色）の純（あしぎぬ）で冠とした。仁冠以下を青・赤・黄・白・黒の5色に配し、徳冠は5色を摂する紫とし、各階の大小は各色の深淺で分けた。冠の形態は「頂撮総如囊，而着縁焉」と記載されている。わが国では、天武11年（682）にはじめて結髪して漆紗冠（しっしやかん）（第40図参照）をつける元服の冠礼を行なうようになったので、それ以前は成人しても総角（あげまき）のままで美頭良（みずら）に結っていた。衣服は、「錦紫繡織及五色綾羅」を着た。古代の日本の冠位の服飾はやはり半島經由の北方系で百済の冠帯16品、新羅や高句麗の官12等、北魏の5等公服などに源流がある。

奈良朝には大宝の制を承けて礼服には文官に礼服の冠すなわち礼冠、武官には皂羅冠すなわち武礼冠また朝服には文武官とも皂羅頭巾などさらに無位者の制服には皂縵頭巾の定めで官人のかぶりものが確立され、そして庶民が朝廷の公事に携わるときにも黄袍に皂縵頭巾を用いていた。推古天皇の時に制定された衣服は大和の中宮寺に蔵されている「天寿国曼荼羅」によってその形態が知られる。日本書紀に「頂はとりすべて袋のごとくし縁を着けたり」とある。冠の地は純といって絹布で位階によって色をちがえたこと、徳冠→紫、仁冠→青、礼冠→赤、信冠→黄、義冠→白、智冠→黒以上は支那の5行説によったもので隋と同じであることは前述の通りである。元日・集会の日には^{うず}髻華^{ひょう}といって徳冠→金、仁冠→豹、礼冠以下→鳥の尾の飾りものをつけた。以上のように役人の服装（かぶりもの）は大陸的になったが庶民は美頭良が多かった。大化3年（647）には冠の地を錦と絹の2種とし織、繡・紫・錦（以上錦）・青・黒（以上絹）、青冠以上を大小の2階に分けている。これが「7色13階の冠制」である。この冠は背に漆ぬりの羅をはった蟬のようなものをつけ冠の縁には地とことなった裂地をつけて位階をしめした。^{うず}釦は金、銀、銅を位階によって別にした。これは儀式用のもので正月・集会用である。平生のものは^{つぽこうぶり}鍔冠^{あぶみ}すなわち黒い絹で作し、形は^{さま}壺鍔^{あぶみ}の状をしている。この時に冠色はなくなった。織・繡冠→深紫、紫冠→浅紫、錦冠→真緋、青冠→紺、黒冠→縁の服色が配された。682年の天武帝10年に新しく漆紗冠と圭冠（第36図参照）が定められたことは前に少しふれたが前者は唐様風で筒形の前後に2本の纓がつき、これを頭上にかぶり、髻を入れた巾子の上をむすび（上緒）前纓は上に反転して巾子の前で結び後纓は後頭で結びこれを垂らしておくか、反転して上緒にはさんでおく。圭冠は袋形をした冠で圭という上円下方の瑞王の形に^{すいぎよく}てこれをかぶりその口のところで、しばるこれを「はしばこうぶり」という。これが後の烏帽子になる。約80年後に位階の表

示が冠から服色の方にうつり後世の装束の基礎ができたのである。

以上飛鳥時代以降の唐風の冠についていえることは(1)冠を用いたのは推古天皇の11年に月壬甲、位冠の創定したときであるといわれている。この冠は色をもって等級を定めたのである。これらの冠は孝徳天皇、天智天皇の朝に改められたようで冠の質で名づけたのである（織冠、繡冠、紫冠）。

大鏡に「太政大臣といへど、出家しつれば、いみななし。されば、この十一人つづかせ給へる太政大臣、ふたところは、出家したまへれば、いみなおはせず。この十一人の太政大臣達の御次第ありさま始終申侍らんと思なり。ながれをくみてみなもとをたづねてこそはよく侍べきを大織冠（たいしよくわん）よりはじめてたてまつりて申べけれど、それはあまりあがりて、このきかせたまわん人々も、あなづりごとには侍ど、なにごとともおぼさぎ賈ものから、ことおほくて、講師おはしなば、ことさめ侍なば、くちをし。」（孝徳天皇の大化三年、七色十三階の冠位を制定せられた時第一位。）「大化三年十二月、是歳制^二七色十三階之冠^一、一日織冠、有^二大小2階^一、以^レ織為^レ之以^レ繡裁^二冠之縁^一、服色並用^二深紫^一」（日本書紀、孝徳天皇条）。あまり→上代のこと。「そのおとど（大織冠）は常陸国にてむまれたまへりければ、廿九代にあたり給へるみかど天智天皇と申、そのみかどの御時こそ、この鎌足のおとどの御姓、「藤原」とあらたまり給たる。されば、よの中の藤氏のはじめには、内大臣鎌足のおとどをしたてまつる。（中略）我女御一人をこのおとど（大織冠）にゆづらしめ給つ。（中略）かのおとどに（大織冠）おほせられけるやう（中略）内大臣（大織冠）の御子とし給。このおとど（大織冠）は（中略）」。（天皇遺^二東宮皇太弟於（中略）仍賜^レ姓為^二藤原氏^一、自^レ此後通日^二藤原大臣^一）……（日本書紀、天智天皇条。）「上達部の御車や、くらおきたる馬ども、冠（かうふり）・表衣（うへのきぬ）きたる人々などのみえ侍りしに、こころえずあやしくて、『なにごとぞ、なにごとぞ』と人ごとにとひ候しかば、『式部卿宮みかどにゐさせ給とて、大殿をはじめたてまつりて、みな人まいいり給なり』とて、いそぎまかりしなどぞ、ものおぼえたることにてみたまへし。」とあるなどは推想すべき資料である。日本書紀に「天武天皇の11年6月壬戌朔には男女が初めて結髪をし、漆紗冠（うるしぬりのうすはたのかんむり）をつけることとなった」とあり続日本紀に「文武天皇の大宝元年3月甲午には冠を賜うことがとどめられ、これにかえるに位記をもってすることとなった」とある。大宝令が発令されその内容は後の養老律令にくわしいからその衣服令によって奈良時代の冠を知ることができるのである。衣服令によると公服は礼服、朝服、制服にわかれる。礼服のときに着用する礼服冠（礼冠）と朝服、制服に着用する頭巾の二つの冠があらわれるのである。

(A') 礼服用の冠

金装の冠で孝明天皇の即位式の時まで用いられたようである。①^{かん}べん冠……天皇の冠で天平4年唐制にならい作られた^{につけいのかんむり}べん板が12章ある冠。②^{にっけい}日形冠……童帝の冠。③宝冠……女帝の冠で孝謙天皇から用いられたようである(第2図参照)④九章の^{かん}べん冠……皇太子の冠。⑤礼冠……礼服用で後に玉冠といわれるもので親王以下5位以上の文官の冠で階級によって制がある。⑥^{くろのら}武礼冠……武官の冠、令制で^{くろのら}毳羅冠を着用し同色の^{おいかけ}綬をつけたようであるが、「儀式」によると武礼冠の名がのっているから平安時代から後の冠であると思われる。

(B') 朝服制服用の冠

漆紗冠の変化したもので令には5位以上は^{くろのら}毳羅・^{ときん}頭巾6位以下は^{くろのかとりのときん}毳縵頭巾と定められ武官はこれに^{おいかけ}綬をつけた。こうして延喜式になるまでこの用語は用いられている。これは袋様のものをかぶり(左右両横に各1脚後に2脚の紐がついている)髻の所を後脚で結び先を後に垂らした。唐の^{ぼくとう}幞頭の系統であるといわれている。

紙上の関係で平安時代以降については次報で報告する。

各冠についての概要は第5報で報告したが形式図については省略したのでこの紙上で掲載する。

・第1図^{かん}べん冠…天皇の礼服用冠、天冠とも王御冠ともいう。5色の玉をつないで垂れた飾りのある冠だから玉冠とも^{りゅう}旒(りゅう)ともいった。旒はかざりである。その製は普通の礼冠の上、巾子上に細い金具を骨として羅を貼った方形の平板状の装飾・すなわち^{かん}べん板をおおいその4方に玉を連ねた糸を環路のように垂すものである。各辺、各12旒である。12旒が^{かん}べん冠の特色で額上中央に日象を立つ。これは水晶2枚を合わせて中に太陽を表わす3足の赤鳥を挿入する。以上は近世の^{かん}べん冠を参考にして記したものである。

・第2図^{かん}宝冠…女帝の礼冠。西宮記臨時4冠に^{かん}べん冠(中略)女帝著に^{かん}宝冠と見えている。唐草の飾りがあって上に鳳凰と日形を立てたものである。

・第3図^{かん}礼冠…礼冠は衣服令の礼服用冠でその品は明記がないから不明であるが、唐の礼服用の冠を模したものであるから唐画に見える冠をもって髣髴することができよう。平安初期のものは延喜式に見えている。それによれば黒漆地の冠で金装、水晶琥珀その他青白の玉数10顆を飾りとしてつけた冠である。

・第4図^{かん}武礼冠…上級武官大儀に着用の冠。貞観延喜のころからできた武官の礼冠である。延喜近衛府の式によれば大儀のとき近衛の大、中、少将を始め衛門、兵衛の督佐(かみすけ)にいたるまでかぶった礼冠であるが、近世の制では大將代にのみ限られた。この冠は唐の武弁冠の金蟬貂尾をもって飾った風を小変して製作したものである。近世のものによればその製は、紫の綸子で5山冠を作り、その周囲に花唐草を透し彫りにした薄金を張

り、その上に黒羅を張った箱様の物をのせ、左右の上方に山雉の羽3枚づつをさしたものである。

・第5図^{かん}三山冠…冠の一つ。黒漆で飾りを施さない冠。形は3峯が並び立っている所以この名がある。大礼のときに贊者、図書(づしよ)、主殿らの着用する礼冠である。

・第7図^{かん}御幘冠…天皇が御神事すなわち神を祭られるときに用いられる冠が御幘冠である。御幘は白い絹で、これをもって御冠の^{かん}纓を巾子の上から前へ折り、巾子の末端に^{かん}纓の先がくるようにした上を巾子ごみに巾子の末端で結んだ冠がこの冠である。御幘の結び方に山科流と高倉流とがある。山科流の結び方は諸鉤(もろかぎ)で、高倉流では片鉤である。

・第9図^{かん}空頂黒幘…空頂黒幘は天皇、皇太子が元服のときに、加冠以前に冠の代りに用いる額当である。有文の^{かん}毳羅で3山形様のもの1枚を縁に綴じてつけたものと及び3山形様のもの3枚を縁に合綴したものの2種がある。3山形様のものの縁は苧麻の心に紙を貼り黒漆塗にしたものである。両者とも薄色の平絹で幅1.5cmばかりの紐、長さ87cmばかりのものをつける。また紫のよりいと紐を別につけるものもあるが、それは補助の紐である。現制では天皇、皇太子より親王、内親王も成年式に着用する。この空頂黒幘の着用はどう奉仕すべきかという、まずこれを額にあて、その後紐を後に引きまわして結ぶのである。

・第11図^{かん}御金巾子冠…この冠は天皇が平生に白小袖、紅袴を着用されるときにかぶられる冠である。まず檀紙2枚を重ねて長さ12cm、幅4.5cmほどに切ったものを合わせて、両面とも金箔でたたみ、その中を長方形に切り抜いておき、^{かん}纓を巾子の上にあてて、前へ折りまげ、再びこれを折り戻して、その上から金箔をだした巾子紙をさしこんだものが御金巾子冠である。要するに巾子紙で^{かん}纓と巾子とおはさんだものである。順徳天皇の「禁秘抄」に巾子紙以=檀紙-用之と見えているから鎌倉ごろから存在したものであろう。

・第12図^{かん}厚額冠…額(甲)すなわち冠の上面の縁である磯の高いのが厚額冠で、低いのが薄額冠である。前者は成人した人の料、後者は少年の料。

・第13図・第14図^{かん}透額冠・半透額冠…冠の上面すなわち額の羅ばかりで張った冠。年の若い人の料。藤原時代には冠は裂一重のため額全部が透けた冠が多かったが、近世の固くなった冠では透額冠は甲に半月形の穴のあるものを称した。なおそれよりも小さい弦月形の穴のあるものを半透額という。

・第15図、第16図、第17図、第18図^{かん}心葉…神事の時に冠の巾子の前方にあてて括る梅花の折枝を模した金銅あるいは穀または糸で作った飾りこれを用いる時は日蔭髻を垂らす。日蔭髻は白、紅、緑の色糸を組んで作ったもので一つに日蔭糸ともいう。通例冠の左右に幾筋も垂下する。

・第19図^{かん}第20図^{かん}日蔭蔓…神事のときに冠につける、1種の飾りである。日蔭の糸、日蔭の紐ともいう。日蔭蔓は山地の日蔭に繁茂する蔓草で、緑色が鮮やかでしかも細毛が集りついているので装飾としての価値がきわめて豊かであるから、わが国古代から神事及びその他の装飾に用いられた。その遺風が奈良時代以後の神事に伝わり、し

かも初めは、蔓草そのものが用いられたが、中古から美しい絹糸のものが代わりに用いられることとなった。初めは緑色が用いられたが、白色が清浄であるところから、白を用いることとなった。ただし時代によって萌黄あるいは白色が用いられた。組糸の飾りは大嘗祭、新嘗祭などの神事に小忌衣（おみごろも）を着用するとき冠の笄（かんざし）の左右に掛け前後に垂下される。明治の登極令によれば男子の冠のかざりにかざり実物の日蔭の蔓を用い、女子用には中古のごとく白い糸の組紐を垂下する。

・第21図、第22図、第23図挿頭花…挿頭花は髪挿しで髪にさす飾、古代には髻華（うず）と称し、木の花や葉を髪にさすことであったが、奈良時代ごろから髪にさすことばかりでなく冠にさす造花のことをカザシと呼ぶようになった。平安朝以降は冠に造花と実花をさす場合を挿頭花というようになった。ただし美豆良の少年は晴のときに髪に直接かざすことがあった。列見（しっけん）、定考（こうじょう）、大嘗祭舞、仏会などにさす。

・第24図、第25図、第26図、第27図、第28図、第29図、第30図巻纒…冠の後方に垂れる纒を巻いたものをいう。纒の端を内になるように巻いて細い夾木ではさんだものである。警固の武官が用いるものであるが、非常のときには文官もこれを用いた。武官警固のときには綏紐をもって冠につけるのを常とした。（江戸時代）

・第31図柏夾…冠の纒の1種、火事など非常のときに文武官を問わず冠の纒の末を外方になるようにたたんで、檜扇の骨を折ってはさんだものである。なおはさみ木は竹などをけずった物を使ったこともある。

・第32図細纒…6位以下の武官束帯着用ときの纒である。細い鯨の髭製の輪2本で、これをもって冠の巾子の根すなわら巾子の後面にある纒壺にさしたものである。ただし古くは竹を細くしたものもある。この冠のときにも綏（おいかけ）をつけた。

・第33図抹額（未額）…未額（まつこう）は俗にいう鉢巻である。緋の絹で武官の冠の磯を巻き後にて結ぶものである。令の時代より存する。「令義解」衣六朝服の条に「衛士、皂纒頭巾（中略）会集等日、加二未額挂甲一。以二皂衫一代二桃染衫一。朔節日則服之」と見えている。

・第35図縄纒（なわのえい）…冠の纒の1種。2筋のな

わで作り、1筋は藁なわになし、1筋は黒布纒である。天皇が諒闇（りょうあん）のときにつけられた冠の纒。

・第36図圭冠…日本書紀29、天武天皇13年閏4月丙戌の条に「詔曰。（中略）唯男子者。有二圭冠一。（はしはかうふり）冠而著二括緒褱」と見えているものが圭冠で、天武天皇のときにできたかぶりもので後の烏帽子の原型である。儀式のときには冠をかぶったが略装のときにはこれをかぶったのである。圭は上円下方だから立烏帽子の形に似ているのである。

・第37図玉冠（ぎよくかん）…金玉で飾った礼冠。①古くは即位式、朝賀など大礼に天皇のかぶられたべん冠の別名。②大儀に参列する諸臣の礼冠が玉で飾られたので玉冠と称した。その制は延喜の制によって制定された。

・第8図放巾子（抜巾子冠）（ぬきこじのかんむり）…元服式の時の冠である。古くには巾子とかぶりものすなわち額とが別れていた名残をとどめている。すなわち冠より巾子のみを抜いてあって、元服式のときに、まず巾子を髻にさし、その後に冠を加えるのである。

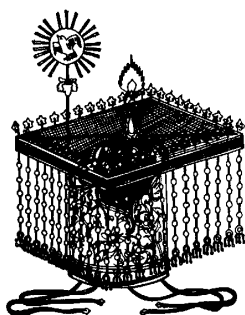
・第38図立纒（りゆうえい）…冠の纒が垂れずに上方にいささか立っているもので、江戸時代にあらわれた纒の形態である。天皇の御冠に主として用いられて今日に及んでいるが出雲大社の神宝にも調進されている。寛文7年出雲大社遷宮の際に神祇の御料として調進したものが同社の神宝となっている立纒の冠である。京都の宮廷と如何なる関係で出雲大社のこの社宝ができたのかその関係は明らかでない。なお立纒は一般の人々は直立した纒と思うが、実はいささか後方へたわめたものである。近世の天皇の画像がこれを示している。

・第39図繁文の冠（しげもんのかんむり）…冠の表面に文様のあるものをいう。巾子、額、磯、海纒に文のある冠である。近世のものは摂家およびその門流使用の冠である。なお天皇、皇太子、親王の冠も繁文で元服式のときの加冠の大臣であった摂家の文を用いた。

・第40図漆紗冠…漆冠ともいう。紗に黒漆をかけた冠。漆紗冠は日本書紀に「11年6月丁卯、男女始結髪、仍著二漆紗冠一（うるしぬりのうすはたのかんむり）」と見えているから、このときから用いられた冠である。漆冠の名は続日本紀に「大宝元年3月甲午、始依二所令一改二制官名位号一。七服制（中略）進冠四階浅纒皆漆冠綺帯」と見えている。唐の制によって作った冠である。

（冠帽図会より）

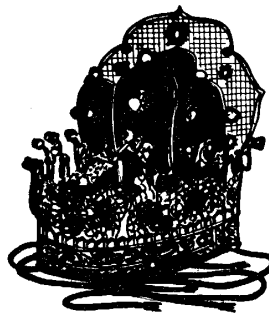
第1図 ベん冠



第2図 宝冠



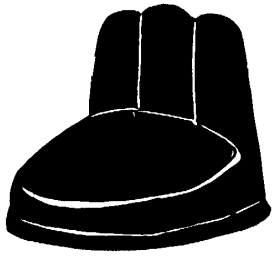
第3図 礼冠



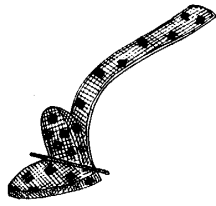
第4図 武礼冠



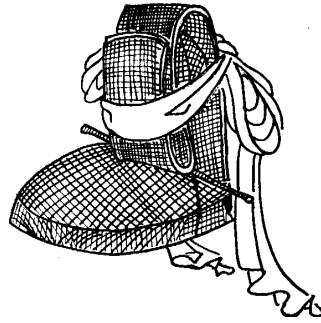
第5図 三山冠



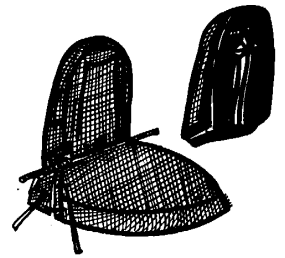
第6図 御冠



第7図 御幘



第8図 放巾子



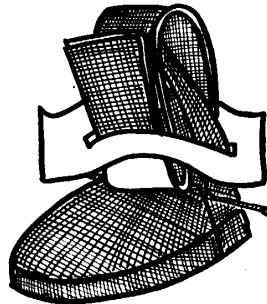
第9図 空頂黒幘



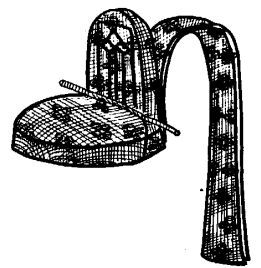
第10図 空頂黒
(東宮御料)



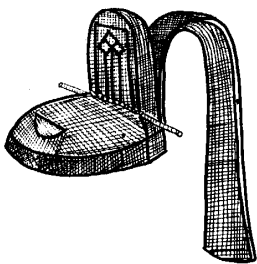
第11図 巾子紙



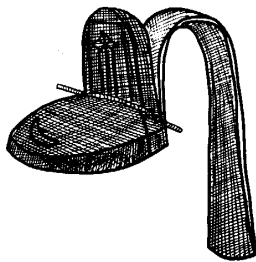
第12図 厚額冠



第13図 透額冠



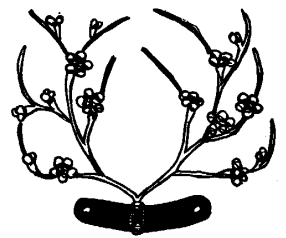
第14図 半透額冠



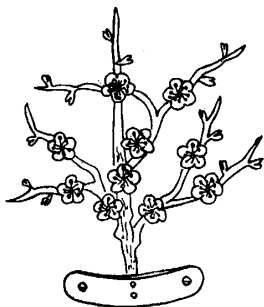
第15図 心葉日蔭蔓



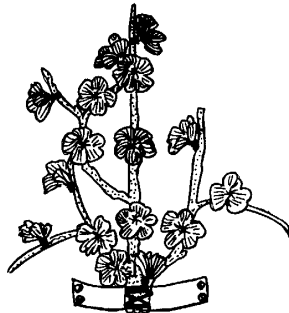
第16図 心葉貝



第17図 心葉金銅



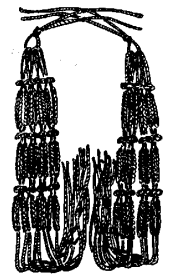
第18図 心葉結花



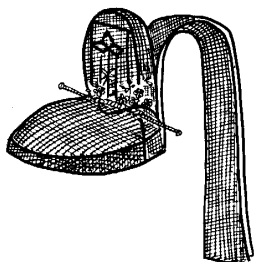
第19図 日蔭蔓生草



第20図 日蔭蔓糸



第21図 挿頭花



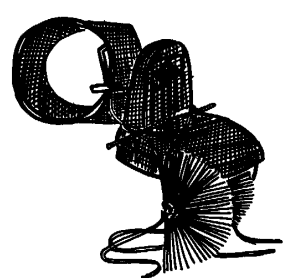
第22図 挿頭藤



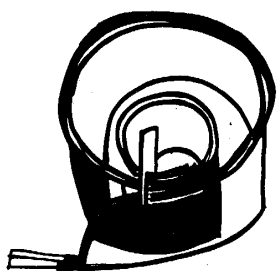
第23図 挿頭山吹



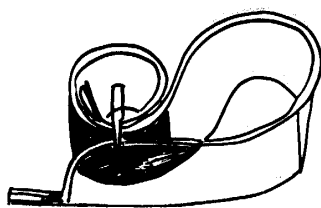
第24図 卷櫻綾



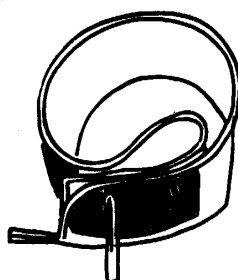
第25図 卷纓
山科家 一条家



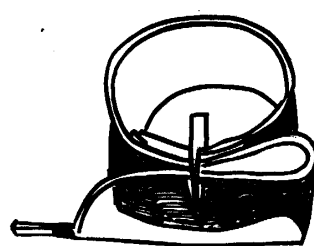
第26図 卷纓 近衛家



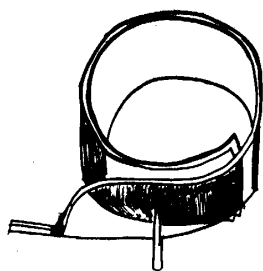
第27図 卷纓
勸修寺家



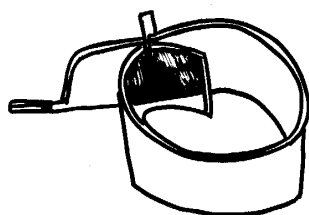
第28図 卷纓
庭田家



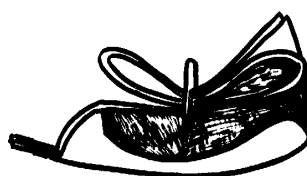
第29図 卷纓 藪家



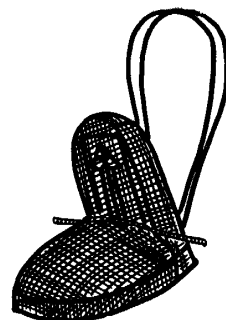
第30図 卷纓 中山家



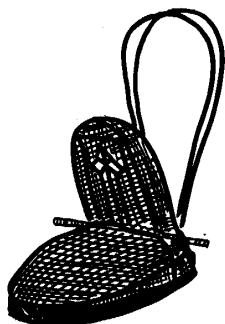
第31図 柏夾



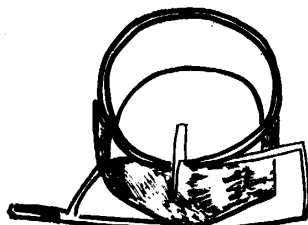
第32図 細纓



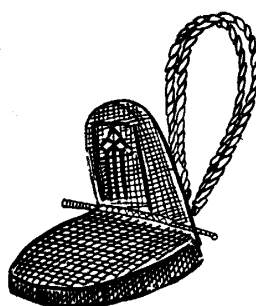
第33図 抹額



第34図 凶事巻繩



第35図 縄纓



第36図 圭冠
(日本服飾史辞典より)



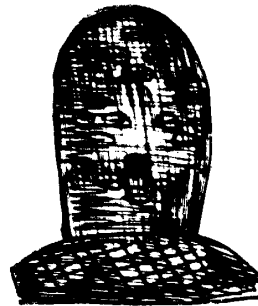
第37図 玉冠



第38図 御立纓



第39図 繁文の冠



第40図 漆紗冠



Ⅲ 要 約

大和朝廷の勢力は5.6世紀頃から増大し用明天皇の妹の推古天皇が即位され、聖徳太子の摂政となった。皇室勢力を基礎に統一国家の理念を確立せんとされたのが太子である。太子の事業は冠位の制定で勲功に従って人々に冠を与え、冠の色の相違によって位階の上下を示すよ

うにしたものであり、これまでの姓が原則として氏に属し、世襲を本位としたのに対し冠位は個人に属し一身限り、門閥打破、人才登庸の意義の深いものであった。しかし位を12階に分け、これに6個の名称をあたえ大小を冠した。冠は朝廷出仕の際のかぶりものであり、公家の大小の儀礼行事、神事祭礼の奉仕にも用いられた。唐制の幘頭を継承した養老の衣服令所載の頭巾と呼ぶ4脚のか

ぶりものから変化したものである。地質に羅・紗などの薄物を用いたので、かぶってから髻との当たりをやわらげるために前に巾子とよぶ壺を設け、これに髻を納めてかぶり、後部の2脚で引締め、結び余りを長く垂下して燕尾といい、これが形式化して纓となった。また他の2脚は左右にあってかぶってから頭上にとり、巾子の前方で結んだがこれも面影を伝えて上緒と後綱になった。

文 献

- 1) 神田秀夫他1名：古事記上 朝日新聞社 169(1962)
- 2) 秋本吉郎：風土記 岩波書店 209~211 (1958)
- 3) 岩佐正：神皇正統記 岩波書店 192 (1965)
- 4) 松村博司：大鏡 岩波書店 63 (1960)
- 5) 武田祐吉：日本書紀 朝日新聞社編刊 (1953)

(昭和48年1月4日受理)